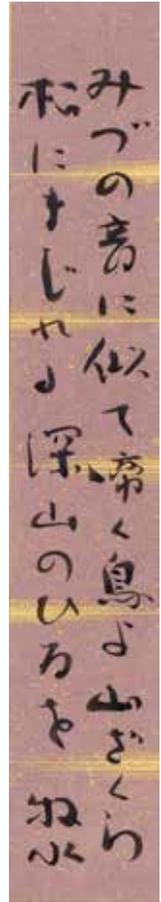


沼津市若山牧水記念館

第70号 令和5年3月15日 編集・発行 公益社団法人 沼津牧水会 TEL・FAX 055-962-0424
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 http://web.thn.jp/bokusui/



みづの音ねに似て啼なく鳥よ山ざくら 松にまじれる深山みやまのひるを 牧水

美しい短冊に若山牧水の自筆で丁寧に書かれたこの短歌は、牧水の第一歌集『海の声』の中段に配されているが、『海の声』と第二歌集『独り歌へる』との合本の形で編まれた第三歌集『別離』では巻頭に置かれている。牧水がこの短歌を気に入っていた証ではないかと思う。なお、『別離』は、牧水が歌人として広く認められることになった代表的な歌集だと言ってよいでしょう。

この短歌について、牧水の高弟大悟法利雄当記念館初代館長は、次のように詳細に解説している。(『若山牧水の秀歌』昭和五十一年二月二十五日 短歌新聞社発行)

『別離』巻頭の歌で、明治三十九年、牧水がまだ数え年二十二歳の春の作である。この年には四月一日から武蔵野の百草山もぐさに行き数日滞在していたから、多分その時の歌だったろうと思われる。(中略)

「水の音に似て啼く鳥よ」は、さらりと歌っているようだが、鋭く光ったものがあり、実に新鮮な、詩情豊かな句で、その小鳥に対する作者の深い親愛感がにじみ出ている。

人家から遠く離れた山中の静かな春の昼、松の緑の中に

咲きまじった山桜があざやかに浮き立ち、あたりにはうらかな春の日ざしが充ち満ち、どこかで一羽の小鳥が啼いているが、その声の小鳥というよりはなんだか細い水のねを思わせて澄んでひびいている。何鳥だか知らないが、心に沁み入るようなつかしい声だと、胸をわくわくさせながら、じっと耳を澄まして聴き入っているのである。(中略)

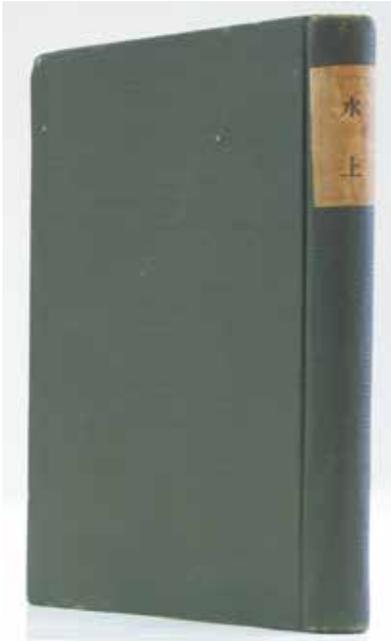
『別離』の巻頭にこの歌をおいたのは、牧水自身でもか나의自信と愛着とのあつた作だということを語っているが、この歌には、牧水の最も好きだったものがいくつも出ている。「牧水」という号が、少年時代に最も好きだった母親の名「マキ」と、「水」との二つを合わせたものだということが広く知られているが、この歌にはその一つの「水」がある。牧水はまた少年時代から小鳥の声が実に好きで、日本野鳥の会の会長中西悟堂氏なども、牧水ほど小鳥を愛しその啼き声を歌っている歌人は他にないと言っているが、この歌にはその小鳥が歌われている。それから、山桜は牧水が最も愛した花で、『山桜の歌』という歌集があり、また牧水はその最後の歌集に『黒松』とつけたほど松を愛したもののだが、この歌にはその山桜や松も歌われている。それは偶然だといってしまうえばそれまでのことだけれど、とにかく牧水の出世歌集『別離』巻頭の一首に、これほどまで多くその好きだったものが歌われているということは、不思議といえは不思議で、なんだかほほえましい気がする。

この短冊は、東京の古書店から購入したもののだが、当記念館の榎本篁子館長の鑑定書が付されている。

牧水と現代と短歌 黒瀬珂瀾

ひとところ山に夕日のさせるごとく東京の市街をおもひてぞ居る
わが朝夕の生活をうすき板のごとく思ひて裏より覗かむとする
わが窓に黒き幕来て垂れてあり汝が生を静かにはぐくめよとて

この満ち満ちた閉塞感というか、諦念を迫られる感覚はどうでしょうか。若山牧水の第六歌集『みなかみ』(大正二年)から引いた歌です。一首目、遠くの山陰に夕日が差してい



『みなかみ』

これらの歌は、牧水が故郷の坪谷村の生家に滞在していた時の歌。明治四十五年、二十七歳の頃です。父立蔵の病気のため故郷に連れ戻された牧水は親族から家を継ぐように迫られ、生家で苦しい日々を送ります。東

る。その明るみのように、東京は遠く、作者にとつて手の届かない場所になつてしまった。二首目、毎日の生活にまるで薄い板一枚のよくな頼りなさを感じる。さらに言えば、板に囲まれているような閉塞感の真つただ中にいて、その感情の板の裏側を覗き見ることで、少しでもその閉塞感から逃げ出そうとしている。

三首目、窓が黒い幕でおおわれて光が遮断される。「生を静かにはぐくめ」という声は、ゆつくりと養生しろよ、という意味なんでしょうが、むしろなんというか、「もうお前はすべてを諦めてここにいろ」という強迫的な声に聞こえてきませんか。やはり「黒き幕」がそういう効果をもちます。

京に戻って文学活動を再開したいという願いと、生家に留まらねばならない現実。この感覚は現代の私たちにも覚えがありませんか。コロナ禍によつて家に閉じこもり、社会から孤立してゆく不安の中で生きた令和の私たちの感覚と非常に近いものがあると思います。つまりこれは牧水流の「ステイホーム」の歌であり、旅を禁じられた旅の歌人によるポエジーがここにあります。

この度、若山牧水賞を頂き、先日、授賞式のために宮崎に行きましたが、その際に牧水生家を訪ねました。そして、牧水が生家滞在中を過ごした二階の一室に入りました。まさに四方を板壁に囲まれた、光の乏しい小さな空間で、なるほどこの部屋の印象が先の歌には反映しているのかもと思ったことです。やはりその歌人が過ごした空間を実地で見ておくのは大事ですね。

尽くるなき怠屈のうちにあれかしと思ふ、
死人のゆびの動く勿れかしと思ふ
わがたいくつの夜に蟬の啼くが聞ゆ、雨
もまばらにわが心にふりそそぐ

『みなかみ』に顕著な破調性は、この閉塞感を巧みに表現していると思います。複雑な家

徴性や暗喩を駆使したこの時期の歌は、朗らかで明々たる牧水の歌しか知らない人が読めば驚くことでしょう。右歌も重々しい空気感に支配されています。父親の死後の歌ということも関係しているでしょう。一首目、息屈の中に自らの人生を沈めようという、一種のあきらめの心ですね。この死人には尊敬すべき父の姿も含まれているでしょう。時は戻るべきではないという思いでしょうか。二首目も、どこかに行きたいという自分の心を押しえつつける「たいくつの夜」に無聊を慰めているのです。つまり、「ステイホーム」を慰める歌です。そして、

餓^うえて一片の^{いっぺん}麵^{めん}麩^ぼをぬすまむとすること

くわが命^{いのち}の眼^{まなこ}ひらけり

何^{いづく}処^{ところ}より来れるや我がいのちを信ぜむと

つとむる心、その心さへとらへがたし

眼^めをひらかむとして、またおもふ、わが

生^よの日光^{にっけい}のさびしさよ

といった歌もあります。右一首目、これはユゴーの『レ・ミゼラブル』のジャン・バルジャンの話を読まえたのかと思います。命を繋ぐ食べ物希求するように、未来の命を求めぬ姿。二、三首目は随分と抽象的ですが、なにか遠いところへの切望というか、脱力的な

自己否定から自分を再生させようという気力も感じます。こうした「ステイホーム」の歌を通して牧水は、憧れへの断念・諦めを詠い、自己への慰めを得て、そして再生しようとする。まさにこの姿勢において牧水は、百年のちのコロナ禍の私たちと精神を言い合わせていると思うのです。

ちなみに当時猛威を振るった疫禍^{えきか}、有名な「スペイン風邪」を詠んだ牧水の歌が第十三歌集『くろ土』(大正十年)に残っています。紀行文集『静かなる旅をゆきつつ』(大正十年)所収の「利根から吾妻へ」によると牧水は大正七年十一月、群馬県の谷川温泉を旅していました。同随筆には谷川村を

此^{こゝ}處^{ところ}がこの溪の行きどまりの部落でこれから上には一軒の人家も無いといふ。雨の晴間に出て歩いて見ると、其^{そこ}處^{ところ}此^{こゝ}處^{ところ}と散つてゐる小屋の入口にみな七五三繩^{しちごさんなは}が張つてある。聞けばこんな村にすら例の西班牙風邪^{スペインかぜ}が流行つて来て、大半はやられてゐるのだ相^あな。

と描写し、この記述に呼応する歌が『くろ土』に二首収録されています。

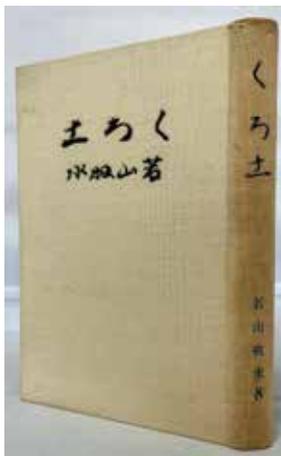
十^とあまり二十^{にじふ}に足らぬ家かずのこの山里に流行性感^{はやりかぜ}流行^{はや}る

はやり感冒はらふといひて軒ごとに張れるしめ縄に雪つみにけり

こんな山奥の小集落にまで病は届く。病魔よけのしめ縄を物珍しく眺める牧水。彼は流行病を積極的には詠みませんでした。この二首のように、実際の景を体験として詠む姿勢を見せていますね。



『静かなる旅をゆきつつ』



『くろ土』

それでは今度は、百年後の現在のコロナ詠を見てみましょう。現代歌人協会が編纂した『二〇二〇年コロナ禍歌集』(令和三年)に収められた現代歌人による作品をご紹介します。

コロナとは孤独の病と見つけたり誰にも
会はず死して焼かる 有沢螢

四月のわたしは孤独だつたと思ひたりマ
スクがなくてちつとしてゐた 田中槐
県境をまたぐ移動を親と子のひかへるも
雲は雲を越えゆく 外塚喬

「手指酒精消毒液」が染み込んであな
に触れた事実も消える 松村正直

有沢螢さんは寝たきりの生活から口述筆記で短歌を発表している歌人です。基礎疾患をお持ちですからコロナには非常に敏感でいらつしやると思います。ですがこの歌では死ぬこと自体よりも、誰にも看取られないことへの怖れを詠まれています。相当の期間、コロナの死者の葬儀は極めて規制されました。コロナを「孤独の病」と言い切る姿勢には、社会や他者、介護者からの隔絶が一番恐ろしい弊害だという意思があります。

田中槐さんの歌もコロナ禍による孤独を詠んでいます。しかし、よく読んで欲しいのですが、孤独であった理由は「マスク」が手に

入らなかったことです。疫病そのものが理由なのではなく、ノーマスクでは外出してはいけないという新しく生まれたルール、それに伴って生じたマスクの品薄という社会状況が作者を孤独にしたと指摘する歌です。同じ文脈で外塚喬さんの一首も、疫禍で右往左往する人間社会と自由な自然や気象との対比です。松村正直さんの歌は、表記の面白さが目を引きますが、街じゅうに設置されるようになったアルコール消毒液ですね。消毒過剰の社会状況において人と人の身体的接触が失われてゆくことを嘆いています。

クルーズ船二月の孤絶の景となる捕らへ
られたる白鯨として 梅内美華子

三月のぼたん雪ふり首都圏は病む白鳥の
ごとくひそげし 小島ゆかり

ザマアミロ東京。蟄居の街をゆくウーバ
ーイーツのヘルメット濡れ 富田睦子

途切れてはまた浮かぶ顔 羊さんはいづ
この部屋のパソコンの前 内藤明

それでは、このような歌はどうでしょう。覚えておいてですか、日本における新型コロナ流行の第一歩は令和二年二月、横浜港に停泊させられたクルーズ船のダイヤモンド・プリンセス号乗客の集団感染でした。あの当時

の報道を皆さんご覧になったと思います。まさにあの客船は梅内美華子さんの一首のように「捕らへられ」ていました。そして当時はまだ、対岸の火事のように遠くから私たちは見つめるだけでした。二首目の小島ゆかりさんの歌も、流行の第一波を迎える日本の都市を俯瞰的に描いています。辛い状況を美しい比喩で描くことで浄化を願う歌ですが、やはりこの歌の特徴は雪の景を広々と想像している点です。つまり映像的であり、どこか気象情報のテレビ報道の画面を思わせるのです。

三首目の富田睦子さんの歌は、疫禍で経済活動が停止した東京を揶揄するというショッキングな内容ですが、ここには東京と地方の格差が疫禍によって再注目されたという視点が重要です。この歌の場合は、作者の立ち位置が重要であり、東京という中心地の繁栄を問い直す意図があると思います。まあ、すぐに疫禍の流行は全国に広がるわけですが……。四首目の内藤明さんの歌は、これはいわゆるオンライン会議の景ですね。「羊さん」は中国人か台湾人か分かりませんが、疫禍により来日できなかつた人とインターネットでオンライン歌会が随分と普及しましたが、疫禍が社会の様々な手段や習慣を変容させてゆく

ことを描いた一首です。オンラインといえ、とても面白い歌があります。

〈オンライン飲み〉に誘へば（オンライン飲み）の先約あると言ふ父 田村元

思わずクスツとしますね。居酒屋に集まったの飲み会が出来なくなったので、各自がオンラインで会話しつつ自宅で酒を飲むという「オンライン飲み」が流行った。父親はそういう事にまだ慣れてないだろうと思って声をかけたら、もうすでに実践していた、というオンライン飲み、あれちよつと気を付けた方がいいですよ。自宅だから帰らなくていいので、ついつい飲み過ぎるんですよ。

以上の歌から見えてくるもの。現代の疫病詠は、疫病そのものよりも、社会状況とそこに置かれた人間の関係性を重視する傾向があると言ふことです。コロナ詠とはつまり疫病による孤独孤立詠です。そしてそれはメディアによって報道された画像、動画などの情報を基盤とするわけで、メディア化された現代における社会と個の関係が詠まれるのです。

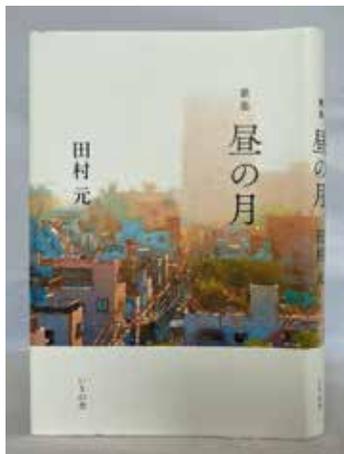
百年前の牧水とは大きく違った感覚で現代の疫病は詠まれます。牧水と私たちの同じところと違う点が、こういうところに見えて来るんじゃないでしょうか。



右から『路上』『朝の歌』『白梅集』『山桜の歌』

では最後に、やはり牧水と言えはお酒の歌を外すわけにはいきませんね。牧水ファンの間では以下のような歌が人気でしょう。

白玉の歯にしみとほる秋の夜の酒はしつかに飲むべかりけれ
ただ二日我慢してゐしこの酒のこのうまさとは胸暗うなる
『路上』
『路上』



田村元の歌集『昼の月』

まさむねのいちがみびん一合瓶のかはゆさは珠にかも似む飲まで居るべし 『路上』
津の国の伊丹の里ゆはるしらゆききたる白雪来る
その酒来る 『朝の歌』
人の世にたのしみ多し然れども酒なしにしてなにのたのしみ 『くろ土』
それほどにうまさかと人のとひたらばなんと答へむこの酒の味 『白梅集』
寂しみて生けるいのちのただひとつの道づれとこそ酒をおもふに 『山桜の歌』

特に説明は必要ないですね。諸手を挙げて酒を褒めたたえ、酒のうまさ楽しさを詠みあげた歌たちです。なんとというか、牧水の酒の歌は真正面から酒に向き合っている。そこにはもはや酒と私の対立構造は無く、酒そのものに没入した境地で詠まれています。

では、現代の酒飲み歌人の歌をご紹介します。先の「オンライン飲み」の作者である田村さんの歌集『昼の月』（令和三年）から。

みちのくの田酒でんしゅのうすき黄を愛でてわれ
が「わ」と「れ」にほぐれゆきたり

旧友の一人のやうにビール瓶かたはらに
あり汗をかきつつ

お客さん旨さうに酒を飲むねえとメ鯖の
上で褒められてをり

よく冷えたホッピーを杯はにそそぐとき控
へ目な王のごとき心地す

どれもお酒が美味しそうな歌ですが、牧水と比べるとその差が明確ですね。一首目、少しずつ酩酊めいてして、「われ」が分解されてゆく感覚。この歌は顕著ですが、これは酒を描くことを通して、酒を飲む寂しい現代人のわれを描いているんですね。二首目も水滴を吹くビール瓶を描写する裏に、忙しい現代社会の労働者像が浮かんできます。三、四首目も酒を通した自画像ですが、どこかコミカルかつシニカルで、ちよつとだけ自嘲の精神が宿っていますね。ただ酒を目の前にして歓喜に踊る心や、沈潜ちんせんした精神を描いた牧水とは、ちよつと違う。真正面から酒に没入する牧水とは違って、田村さんの酒の歌には様々な他者

や素材があり、自己の客観視があります。

メ鯖のひかり純米酒のひかりわが暗がり
をひととき灯す

辛口の「谷川岳」を北に置きわがテーブ
ルは関東平野

栄転をする人のため飲む酒も酔へば十中
八九楽しき

こういつた歌からも田村さんの酒への向き合い方がよく解ります。右一首目の「ひととき」に実感がありますね。現代社会における「小さな救い」としての酒のあり方。酒への信仰を思わせる牧水ほどのどっぷりとした敬意方とは違う。そして二首目のように、しゃれた感じに生活を彩る酒の楽しみ方はとても現代的で楽しく思えます。三首目のようにお酒が社会的な役割を果たすこともあり、栄転できない自分を慰めもします。

同じ酒を詠んでも、牧水と百年後ではこうも違う。どちらが優れているという話ではありません。それだけ社会が変化して、それに伴う形で歌の姿も変わってきたと言うことです。牧水のように全精神で対象に没入する詠い方は、高度に情報化し、メディアに取り巻かれ、社会構造が複雑化した現代の私たちに難しい。しかし現代には現代精神ならではの

の様々な多様な歌が生まれます。そんなことをステイホームや疫病詠、お酒の歌などを通して見てみました。牧水と百年後の私たちの歌の通じ合う箇所と違う箇所、それらを見比べることで両方を楽しんで読んでゆくことが、豊かな歌の世界を保証してくれることになるのでしよう。

「筆者プロフィール」くろせ からん



昭和五十二年（一九七七年）大阪府生れ。大阪府立大学院文学研究科修士課程修了。広告制作業などを経て現在は富山市の願念寺住職。未

来短歌会、読売歌壇選者。

平成十五年に第一歌集『黒耀宮』で第十一回ながらみ書房出版賞、平成二十八年に第三歌集『連喰ひ人の日記』で第十四回前川佐美雄賞を受賞。そのほかの歌集に『空庭』がある。令和三年に発表した第四歌集『ひかりの針がうたふ』で第二十六回若山牧水賞を受賞。令和四年十月二日に開催した第六十九回沼津牧水祭・短歌大会」の講師。

第三十三回
中学生短歌コンクール



第三十三回

中学生短歌コンクールには、

沼津市内の全十九校の中学校から千五百九十首の応募があり、特選十首、入選四十一首が選ばれた。

選歌は、沼津牧水会理事の永久保英敏、河本尚子、湯山昌樹、及び

沼津牧水会会員の勝俣文子が行った。選歌に初めて携わったが、日常生活を自分の言葉で表現した作品が多く目に留まった。

なお、特選十首は、令和四年十月十六日(日)に開催された第六十九回「沼津牧水祭・碑前祭」にて表彰された。以下、特選の作品を紹介する。
(湯山昌樹)

百均で買ったパキラに新芽出て小さな幸せ僕だけのもの

平賀翔馬(市立高中等部)
「パキラ」と具体的に詠んだことで、情景がより生き生きと浮かび上がった。「百均」にも現代の社会状況が感じられ、中学生という枠を外しても評価できる佳作である。

火おこしで火の神様が降りてこずマツチ十本かまどの中に 長澤碧音(第五中)
学校行事を詠んだ作品。なかなか火がつかないという「みんな経験しているが詠もうとしない」場面を詠んだところがよい。「十本」の具体が作者の苦勞をうかがわせる。

言わせない余計なことは言わせない目で訴える三者面談 土屋穂乃(門池中)
この視線は、親に対してか、先生に対してか、あるいは両方かもしれない。短歌で嫌われる言葉の繰り返しをあえて使ったところに作者の心情がうかがえる。

ルアー投げリール巻く間のΩサン紅に染まる夕焼けの海 藤井喬規(門池中)
「Ωサン」は最近の言葉だろうか。やや繰り返しが気になるが、釣りという場面での時間の経過を感じさせると捉えたい。

川岸を独り眺める翡翠は僕の心を白紙に戻す 甲斐元裕(大岡中)

自然の中で自分を見つめ直す作者である。忙しい中学生にも、こんな姿があることを好ましく感じた。

暗闇に光る蛍と川の音とつとつとつとねだる子供ら 鈴木佑紀奈(第二中)
ただ「蛍が美しい」だけではなく、幼子の姿を描くことで、期待をほらんだ初夏の夜の雰囲気を生き生きと表現した。

たこ焼きの中を留守にしどこいった私のタコは海に帰った? 清水そら(大岡中)
タコが入っていなかった悔しさをユーモラスな表現に包んだ。ひらがなとカタカナを使い分けたところに工夫が見える。

粉雪を追いかけつかむ妹に舞い降りてくる初めての雪 伊藤愛那(第三中)
はしゃぐ幼い妹の姿に、作者の心も浮き立ってくる様子がよく描かれた。

校長の話聞いてる運動場つむじで卵が焼けそうだなあ 鈴木心春(門池中)
暑さの中での集会。「つむじ」という語の選択に、作者の言語生活の豊かさを見る。

皆笑う僕は夢見る国語の授業火星で働く未来の自分 橋本泰成(金岡中)
自分の将来を思い描く姿には、中学生らしさがあふれ、このコンクールにふさわしい。

第二十七回若山牧水賞に 奥田亡羊氏の歌集『花』



(宮崎日日新聞社 提供)

第二十七回若山牧水賞は奥田亡羊氏の第三歌集『花』に決まった。選考委員は、佐佐木幸綱、高野公彦、栗木京子、伊藤一彦の四氏である。

奥田氏は昭和四十二年京都市生れ。早稲田大学第一文学部卒業後NHKに入局。担当番組の出演者だった佐佐木幸綱氏に出会い、短歌結社「心の花」に入会。平成十四年NHKを退職し、フリーランスのテレビディレクター、定時制高校の自立支援相談員などを務め、群馬県の少年院での短歌指導を続けている。相模女子大、早稲田大学講師。受賞作品は、さまざまな仕事を渡り歩いて社会の隅々に視線を注いできた奥田氏の半生を反映している。平成二十年に第一歌集『亡羊』で現代歌人協会賞、平成三十年に第二歌集『男歌男』で前川佐美雄賞をそれぞれ受賞している。

奥田氏は「歌集の大きな特徴として、自分の第三者が多く出てくる。短歌は私小説になりがちで、ともすれば必ず自分が主語になり、社会を詠んでも、やはり自分の思いは投影されている。自分だけで完結するのではなく、いろんな人が生きている現代社会があるというところを描きたい気持ちが歌にも表れているのではと思います」と語っている。

選考委員の各氏は以下のように評している。佐佐木幸綱氏は「受賞作は何か一つのことについて書いているのではなく奥田さんの様々な経験を元にテーマ、題材共に大変バラエティーに富んだ内容となっている。型に縛られない人生を送ってきた経験が反映されたものだろう」。高野公彦氏は「奥田さんは実践的に自由に詠んでいるという点を評価したい。その一方で写真表現を基本としながら堅実に詠んだ歌もある。これまでの人生を通じて経験したことを、面白く、かつ味わい深く詠むことができている」。栗木京子氏は「歌の題材になった対象に向けるまなざしが慈しみ深い。鋭さや批判精神も持ち合わせているが、決して上からものを言うのではなく痛みを分かち合いながら詠っているところに最も引かれた」。伊藤一彦氏は「啄木や釈道空のように、

著名な歌人にも（分ち書き）を用いた前例はあるが、短歌界において一行書きが普通とされる中、あえて二行書きに挑戦している」。

授賞式は、令和五年二月二十一日（火）に宮崎市の宮崎観光ホテルで行われ、翌日には奥田氏による受賞記念講演会が「カルチャープラザのべおか」で行われた。歌集『花』からの自選十五首のうちの十首を紹介する。

鏡の奥にひと月ぶりの髭を剃る
空には竜の匂いがした

暮るる世界に靴のみ白く歩みゆくわれらか
とうに駢つかれて

月光をもろ手ざわりに採みしだく

菊ならば菊におい立つまで

鳥葬のような交わり重ねつつ

夜ごとに人の青空を見る

アルバイトの経験をたとえば俯きて

鹿の膾分けの熱さを語る

山からは山の匂いが流れきぬ

定時制高校の夜の運動会

きょう会いしひとりとは光、ひとりは風

ながき日暮れを揺れる穂すすき

形なき猫を抱けば

あたたかい袋のなかに骨が動いた

滴れる花火にしばし総身を照らし出され

て子のしずかなる

今日のために生きん今日あり

丈ひくき躑躅の奥に蟻みだる見ゆ